

(7) 軍隊生活

大学卒業後の1937(昭和12)年に丸山は徴兵検査を受けて乙種合格とされたが、第二乙種となって現役は免除された。翌年には二等兵教育召集により松本市の陸軍歩兵第50連隊補充隊に応召するが、即日帰郷となっている。

1944(昭和19)年7月、ふたたび歩兵第50連隊に応召し、朝鮮の平壤に向かった。結婚から4か月後のことであった。出征の日の朝まで論文「国民主義の「前期的」形成」を執筆し、松本に向かう途中の新宿駅で原稿を同僚



の辻清明に手渡したという。平壤では初年兵教育を受けたが、到着後2週間で脚気にかかり、平壤第二陸軍病院に入院した(画像:平壤第二陸軍病院入院中の丸山<丸山彰氏提供>)。退院したのは10月で、同月中に召集解除となった。

翌年3月には臨時招集を受け、広島市宇品の陸軍船舶部隊暗号教育隊で暗号教育を受けたのち、同隊の人事係を経て船舶司令部参謀部情報班に配属された。ここでは、国際情報の収集・要約などの作業に従事している。

通常、高等教育機関修了者は士官となることが期待され、そのために幹部候補生を選抜する試験を受けるよう推奨されるが、丸山は幹部候補生となることを志願しなかった。これは、「軍隊に加わったのは自己の意思ではないことを明らかにしたい」と考えたためであ

る。しかし反戦思想の持ち主ではないかと疑われ、志願しない理由をしつこく聞かれて弱ったという。

丸山は入院していたこともあって、軍隊生活の半分以上を一番下の階級である二等兵として過ごし、敗戦の前月に一等兵に昇進、さらにポツダム宣言受諾後の一斉進級措置によって上等兵として召集解除を迎えた（いわゆるポツダム上等兵）。丸山の軍隊生活は通算でも1年に満たなかったが、そこでは些細な理由で振るわれる暴力にさらされた。軍隊では社会における立場は意味をもたず、軍人としての階級によって定められている上下関係に従わなければならない。それがかえって、軍隊に対する国民の支持を生み出していたと丸山は観察している。

兵隊に入ると、「地方」〔軍隊外の一般社会〕の社会的地位や家柄なんかは（皇族をのぞいて）ちっとも物をいわず、華族のお坊ちゃんが、土方の上等兵にビンタを喰っている。なにか、そういう疑似デモクラティックなものが相当社会的な階級差からくる不満の麻醉剤になっていたと思われるのです。（飯塚浩二・豊崎昌二・丸山眞男「日本の思想における軍隊の役割」）

日本の敗戦は避けがたいという見透しをもっていながら、階層秩序の最下層で生き抜いていくしかなかった丸山の軍隊生活は、内面的屈折を伴うものであった。

〔戦争に敗れるという〕大体的見透しがハズレなかったといったところで、べつに何の抵抗をしたわけじゃないし、それどころか、一種の二重人格みたいな生活をしていたんですから、今思い出しても自分の姿はみじめなものです。ああいうメカニズムの中

で、自分のなかにある浅ましいもの、いやらしいものをいろんな形でマザマザと実感したことが、マア、しいていえばいい体験だったということになるでしょうね。(宇佐見英治・宗左近・橋川文三・丸山眞男・安川定男・矢内原伊作「戦争と同時代」)